

## <巻頭言>



## 平成8年，1996年の新春を迎えて

黒田 晃\*

(株)日本大ダム会議会員の皆様並びにダムに関係のある方々，平成8年の新春を迎え，おめでとうございます。皆様にはさぞかし新しい希望をいだいて初詣をなされたことと存じます。

昨年を振り返りますと，1月17日早朝，淡路島を震源として，一部地域では震度7を記録する大地震，阪神・淡路大震災により，死者5,500人を越え，建築物の倒壊・市街地の延焼・公共施設・ライフラインの大被害等，戦後最悪の大災害となりました。現在政府並びに関係自治体におかれては，復旧に全力を尽くしておられるところであり，1日も早い復旧を願うと共に悲しくも犠牲となられた方々のご冥福をお祈りいたします。

ダム施設について政府及び関係機関が近傍に所在する251ダムについて点検・調査したところ，直ちに対策を必要とするような被害・変状等安全管理上重大な問題は見当たらなかったのは不幸中の幸いでした。

また3月20日早朝，東京地下鉄サリン事件が発生し，無差別テロにより多くの犠牲者がでて巷間話題となり，9月には沖縄にて駐留軍兵士による少女暴行事件がおき，日米地位協定をめぐる大きな政治問題となりました。更にバブル崩壊にともなう金融業界における大量の不良債権処理問題，大和銀行の不祥事件等金融業界は国際信用を失いかねない状況でありました。従ってこのような社会・経済状況のもとでは二度にわたる大量の補正予算支出，公定歩合の引き下げにもかかわらず，経済の回復は遅々として進んでおりません。

一方，このような灰色の社会・経済状況の中で，平成2年に発生した雲仙・普賢岳火山噴火による災害も，当局のご努力により復旧の曙光が見えてきました。また永年マスコミを賑わした長良川河口堰は運用を開始し，九州自動車道が全線開通して，青森から鹿児島まで縦貫自動車道が全線供用を開始する等，先行き明るい希望を持てる状況でもありました。

翻って我々が関係するダム建設についてはいかがでしょうか。

---

\* (株)日本大ダム会議 会長

近頃、環境問題からダム建設不用論が一部で世界的な傾向となっております。印度のナルマダダム、国内では長良川河口堰、細河内ダム等がその対象となっております。国際大ダム会議に於ても環境問題を主要議題として、各国の技術者が真剣に議論し、環境保全とダム建設とが両立する技術の導入を試行しているところであります。長良川河口堰も鮎の人口孵化から始まって、各種魚道の研究、貴重植物の保存、堰上流の水質保全、河川水位上昇による堤内地への浸透・漏水対策等の研究を行い、一部から問題の指摘がありますが、現時点では環境保全を考慮した世界に誇りうる構造物ではないでしょうか。環境問題は研究すればする程奥深い問題であります。一つの山を越えれば更に次の山があり、丁度登山の様なもので、その頂上を極めるには幾多の困難を克服しなければなりません。環境問題と水利用・ダム建設との調和をはかり、人類が健康で快適な生活を享受できるように努力することこそ、我々技術者に課せられた使命であると思います。

水は生活の基盤となる重要な資源であり、人類の歴史は水の恵みのもとに始まったと言われている如く、我々の生活・文化・経済は水に支えられて発展してきました。我が国における人口1人当たり年降水量は5,281 $\text{m}^3$ と、世界平均26,871 $\text{m}^3$ に比べて1/5と少ない。更に山岳地帯からすぐに海に出る我が国の河川は、急流河川であり、それ故に最大流量と最小流量との比、河況係数は非常に大きくなっています。従って河川の自流をそのまま経常的に利用することが困難な状況であり、一度、渇水ともなれば地下水を汲み上げてその場をしのぐ有様です。そのため地盤沈下現象が再び各所で見られます。乏しい水資源の有効利用は勿論ですが、廃水を高度処理して再利用に役立てることも重要でしょう。

渇水は日本中一斉におきるものではありません。また水量の豊富な地域と乏しい地域もあります。どうしても一河川の水利用可能量は自ら決まります。

昔から空気と水はタダ、との言葉の通り、一般的には水道料金の値上げには大きな抵抗があります。米国開拓局が言う様に、水料金と使用水量との相関関係はありましようが、高い料金制度により水需要を抑制する方法は、我が国ではとれないと思います。

今年は空梅雨で一滴の雨もなく、河は普段見せない河床が現われ、家庭菜園にまく水は勿論、顔を洗う水さえ不自由し、たまに来る給水車が待ち遠しい。新しくひいた水道の蛇口が恨めしい。ところがその蛇口からポトリ、ポトリと水が落ちているではないか。ためしに蛇口を廻わしてみると水が进了。万才！。今年、青森から鹿児島まで送水路幹線が完成し、有無あい通ずる様に水の融通ができるようになったんだ。と思った時に目が覚めた。ああ初夢だったのだ。初夢が正夢となることを期待して初詣を終えた正月でした。